

『獄中記』にみるワイルドのイエス

山口哲生

(活水女子大学教授)

ワイルドは、地位、名誉、妻子、財産、自由の一切を剝奪されて囚人となった「悲しみの人」たる自分を、Via Dolorosa のイエスに重ねあわせて、自分の悲劇性を表現してみた。彼は自分のロマンティシズムの美学をイエスの生きざまに託して表現しようとしたのであるから、イエスは手段である。ワイルドは宗教的レベルでイエスと出会ったのではないから、彼のキリスト論は、自分の芸術観を正当化するためにイエスを利用して語った彼の芸術論である——と、かつて私は考えた。

しかし、芸術観を表しているのだから宗教性はない、と一方をとれば他方を切りすてるというのではなく、芸術観の中にも宗教性があるとは言えないか、と今回は考えてみた。

George Woodcock は「ワイルドがキリスト教の神学的な面にきちっとした関心を示さなかったからといって、キリスト教にたいする彼の興味が必然的に〈審美的〉で、深みのないものと決めてかかるのは間違いである」と *The Paradox of Oscar Wilde* の中で述べている。獄中のワイルドは罪というものを抽象的な次元で語っているのではなく、実際に罪を犯し（というのは、当時の法律、宗教にてらして、ワイルドがやったことは crime であり sin であった）、実際に刑に処せられていたという状況であればこそ、何ごともない時よりはるかに切実な思いをもって、イエスに接近していたと考えられる。

「キリストがもっとも現実的という意味でもっともロマンティックなのは、罪人にたいするときである。……彼は、いまだ世の人々に理解されていないやり方で、罪と苦しみをそれ自体で美しい聖なるもの、完璧の様式と見た」とワイルドは言うが、このようなイエス観がもっともよくあらわれているのが、イエスに香油を注いだ女について語っているところであろう。高価な香油をイエスに注いだこの女の行為は、計算に基づいたものではなく、その時、そこで出会ったイエスへの、あらゆる打算を越えた愛の集中であった。そこに魂の本当の美しさを見ているイエスをワイルドは見ている。ワイルドは、いわば、ダグラスへの愛のために人生を御破算にした。愚かなことと世間は嘲弄するし、自分でもそう思ったであろう。しかしイエスが香油の女にたいして「この女は多く愛したから、その多くの罪は許されている」と言うのを聞いて、ワイルドは世間の見方とはまったく違うイエスの見方に感動した。ワイルドは、イエスを頭で理解していたのではなく、体で感じていた。イエスを大いに神格化し、その神聖さを説くことはできても、“the dynamic forces

of life” が血肉化しているイエスを語るができない人々とは違って、ワイルドのイエス観は、そういう人々からは異端として非難されるであろうけれど、不思議に生き生きとしたイエスを、体温をもったイエスを、伝えてくれる。

ワイルドが獄中で愛読したルナンの『イエス伝』は、「イエスは人の心を、それが内包する愛の強さによって評価した。罪を犯したがゆえにへりくだった気持ちになり、涙にあふれた心をもつ女の方が、罪を犯さなかった普通の人よりもイエスの国に近い。普通の人というものは、罪を犯さなかったという消極的な価値しかもたない場合が多い」と語っているが、このような言葉にワイルドはぜひ分慰められたことであろう。

ルナンの『イエス伝』は、シュヴァイツァーに「最悪の意味でのキリスト教芸術」（『イエス伝研究史』）とよばれているように、神様の専門家たちの覚えめでたくない書物であるが、ワイルドには生き生きとしたイエスを再現させた。“Oscar Wilde and Ernest Renan” という論文の中で Joan Harding は、「ルナンにとってもワイルドにとっても、教会の誤りは、キリストの純粋な詩的精神を教義という静的な法典の中に移し変えようとすることである。神学は、宗教的真実を定義しようとするまさにそのことにおいて、無限の神を人間的概念のわく組みの中に閉じ込めようとするのである。そして宗教の本質を見失ってしまう」と述べている。

ワイルドが獄中で出会ったイエスは、「教義という静的な法典」とらわれないイエスであり、相手の悲しみを素直に自分の心にうつしとる豊かな想像力をもつイエスであった。ワイルドのいう「詩的正義」のイエスとは、罪や苦悩を美に変え得るイエスである。この世的にはぜひ分悲惨で苦しい牢獄生活の中で、ワイルドはそのようなイエスとの美しい出会いをしたと言えよう。これを、神との幸福な出会いの瞬間とよぶことは許されないであろうか。

『獄中記』におけるワイルドのカトリック志向

安藤千春

(上智大学大学院生)

宗教もしくは、その信仰心は、微妙な、同時に深刻な問題を抱えている。例えば、数ある評伝の中には、ワイルドがプロテスタントの幼児洗礼を受けたとするものもある。その後、ワイルドは、4、5才の頃に、カトリックの洗礼を受け、臨終の際に、再度、カトリックの洗礼を受けている。